

うつぼ物語より (三)



関根慶子

まえがき

二回にわたって俊蔭の漂流譚を紹介したが、俊蔭はその後日本に帰り、結婚して一女をもうけた。朝廷からも重く用いられようとしたが、拝辞して家に籠居し、ひたすら娘に琴を伝授した。娘は琴にもすぐれ美しくなつて多くの貴人から求婚されたが、父は応じなかった。そのうち母が病死し父俊蔭も統いて病死してしまつて、若い娘一人残つて召使も次第に離散し、ただ一人の老女が世話してくれたが、物心共にたよらない生活となつた。そこへある日、ふとしたことから高貴な若君がおとずれて一夜のちぎりを結び、娘は妊娠して男の子(仲忠)を生むことになる。しかし、貴人は心ならずもその後娘を訪うことは出来なくなつた。忠実な老女一人が俊蔭の娘とその子仲忠とを世話して心細く貧しい生活だったが、次に掲げる文章にあるように、間もなく老女も死ぬ。ところが仲忠は幼少から親を大切にすつて、野山をめぐつて食をあさり母を養うようになる。その話を便宜上、仲忠の孝養譚と名づけて以下に御紹介する次第。仲忠はつまり俊蔭の孫に当り琴の秘曲は伝えられていく。

一、仲忠の孝養その一

(仲忠)

この子三つになる年の夏ごろより親の乳飲まず。母あやしがりて「など吾子はこの頃は飲まぬぞ。なほ飲め。苦しうもあらず。ことものは食はず、乳をさへ飲まずはいかがせむ」といへば、「いな、今はな飲ませ給ひそ」とて、飲まずなりぬ。かかる程に、この子は、すくすくとひきのぶるもののように大きになりぬ。生ひいづるままに、いとなくうつくしげなり。いささか見聞きつること、さらに忘れず、心のさとくかしこきこと限りなし。かくいとときなきほどに、親の苦しがるべきことはせず、親はかなしきものなりけりと思ひしりたり。

かかるほどに、この子五になる年、秋つかた、おうなうせぬ。この親子いささかも食ふこともなくなりぬ。日を経てつれづれとあり。この子出で入り遊びありきてみるに、母のもの食はずあるを見て、「いかでこれ養はん。いみじう悲し」と思ふ心つきて思へど、さる幼きほどなれば、なでふわざをもえせず。つとめて、近き河原に出でて遊びありけば、釣するもの魚を釣る。「なににせむとするぞ」といふに、「親のわづらひて、ものも食はねば、たばむずるぞ」といふに、「さは親にはこれを食はするぞ」と知りて、針をかまへて釣るに、いとをかしげなる子の大いなる川づらに出でて釣れば、「かくらうたげなる子を、かく出だし歩かする、誰ならむ」と思ひて、「なににせむに、かくはするぞ」といへば、「遊びにせんずる」といふ。らうたがりて、「われ釣りて取らせん」とて、多く釣りて取らす人もあるを、もて来て親に食はせなどしありくを、「かくなせそ。もの食はぬも苦しうもあらず」といへど聞かず。かたちは日々に光るやうになり行く。見る人、抱きうつくしみて、「親はありや。いざわが子に」といへば、「いな、おもとおはする」といひて、さらに聞かず。その暖かなるほどは、かくし歩きて母に食はず。夢ばかりにてもただ子の食はするものにかかりてあり。

〔口訳〕 仲忠は三つになる年の夏ごろから親の乳を飲まない。母は不思議に思つて、「どうして坊やはこの頃お乳は飲まないの？ 今迄通りお飲みなさい。かまわないよ。外の物は食べないで、お乳まで飲まないのでは、どうしましょう。」と言つと、「いいえ、今はもうお飲ませにならないでね」と言つて飲まなくなつてしまつた。こうしている中に、この子は、すくすくと何か物でも引き延ばすように大きくなつた。大きくなるにつれて、とてもくらべるものもないように可愛らしい。そして、ちょっとでも見聞きしたことは、決して忘れず、心が明敏でいろいろなことは限りもない。こんなに幼い頃なのに、親の困るようなことはせず、親は大事なものだなあと、よくわかつていた。

こうしている中に、仲忠が五才になる年、秋の頃、老女は亡くなった。そこでこの親子は少しも物を食べることもなくなつた。日がたつが何をするでもない。この子が出たり入ったり遊び歩いてみると、母が物も食べずにいるのを見て、「どうして母を養おうか、本当に悲しい」と思う心がついて考えてみるが、そういう幼い年頃なので、何ということも出来ない。早朝、近くの河原に出て遊び歩くと、釣をするものが魚を釣っている。仲忠が、「それは何にするのか」と言うと、「親が病気で、何も食べないので、魚でもいただこうかというんです」と言うので、仲忠は「それでは親にはこれを食べさせるものなんだ」と心得て、針をしかけて釣っていると、大層可愛らしい子が大きな川の岸に出て釣っている。人は「こんな品のよい子を、こんな所に出して釣をさせるなんて、一体親は誰なんだろう」と思って、「どういうわけで、こんな事をするのか」と聞くと、仲忠は「遊んでいるんです」と言う。可愛く思つて、「ひとつわたしが釣ってあげよう」と言つて、沢山釣つて仲忠に与える人もあるのを、持つて帰つて母親に食べさせるなど、毎日出歩いていると、母は、「こんな事をしなされる。物を食べないだつてかまわない」と言うが仲忠は聞かない。この子の容貌は日々に光るように美しくなつてゆく。それを見る人は抱いたりして可愛がつて、「親はあるの？ さあわたしの子にならないか」など言つと、「いいえ、お母さんがいらっしゃる」と言つて、決して聞き入れない。氣候の暖かい間は、このように釣をして歩いて母に食べさせる。夢のようだが母はただ子の食べさせる物で生きていた。

注、当時の女性は、今日のように種々の職場に働くことが出来なかつたから、生活の資を得ることが困難であつた。だからこの俊蔭女のように、父母が死にまたそれに代るべき経済的背景がなくなると忽ち貧窮におちいつてしまうのである。これは物語であるからフィクションも勿論あるが、高貴な女性やまたそうした出身の女性は、殊にやたらな出歩きなども出来ないで生活の道が立たないのである。俊蔭女（仲忠母）が特にほかであつたわけでは決してない。その貧困ぶりも当時の時代相の表れの一つとみるべきである。

二、仲忠の孝養その二

冬の寒くなるままに、さもえなすまじければ、この子「わが親に何をまゐらせん。いかにせん」と思ひて、母にいふやう、「魚をとりに行きたれど、氷いとかたくて、魚もなし。おもといかにかし給はんずるぞ」といひて泣く時に、親「何か悲しき。な泣きそ。氷とけなん時にとれかし。我もの多く食ひつ」といへど、なほ明くれば河原に行きて、人多く、車などある時

は、その程すぐして出でて見るに、水は鏡の如く氷れり。その時この子いふやう、「まことにわれ孝の子ならば、氷とけて魚いで来。孝の子ならずは、ないで来そ」とて泣く時に、氷とけて大いなる魚いで来れり。とりて行きて母にいふやう、「我はまことの子なりけり」と語る。小さき子の深き雪をわけて、足手は蝦のやうにて帰り来るを見るに、いと悲しくて、涙を流して、「など、かく寒きに出でてはありくぞ。かからざらむ折いでてありけ」と泣けば、「苦しうもあらず。おもとを思ふ」とて、とどまらるべくもあらず。ありつる魚はいをと見つれど、百味を供へたる飲食になりぬ。あやしう妙なる事おほかり。

〔口訳〕 冬が寒くなつて行くにつれ、そんな釣なども出来ないので、仲忠は、自分の母に何を差上げようか、どうしようか、と思つて母に言うには、「魚をとりに行きましたが、氷がとても固くて、おさかなもありません。お母さん、どうなさいますか」と言つて泣くと、母は、「どうして悲しいことがあるか。泣いてはいけない。また氷がとけたなら取ればよい。お母さんはもう沢山食べたんですもの」と言うが、それでも夜が明けると仲忠は河原に行つて、人が多くいたり車などが出てくる時は、その間を待つて出て見ると、水は鏡のように一面に氷っている。その時この子の言うには、「本当に、わたしが孝行の子であるならば、この氷がとけて魚よ出て来い。孝行の子でないなら、出て来るな」と言つて泣く。するとその時、氷はとけて大きな魚がおどり出て来た。そこで仲忠はそれを持って行つて、母に言うには「わたしは本当の孝行の子でしたよ」と話す。けれども母は、こんな小さい子が深い雪をふみ分けて歩いて、足や手は蝦のようにかじかんで帰つて来るのを見ると、大層悲しくて、涙を流して、「こんなに寒いのに、なぜ出歩くのか。こんなでないような時に出て歩きなさい」と言つて泣くと、「大丈夫です。お母さんが心配です」と言つて、やめそうもない。先の魚は魚と見えたが、いろいろなおいしい味をそなえた食物になつた。こうして不思議に靈妙なことが多かつた。

三、仲忠の孝養その三

かかるほどに年かへりぬ。この子まして大きにさとくかしこし。変化のものなれば、ただおとなのやうになりて、人にみゆれば、「たが子ぞ。親はたれとかいふ。このわたりにあるなるべし」などいひて、求むれば、「おのづからたづねもきぬべ

し。かくありきて、人にも見え知られじ。この河にのみ魚はある」と思ひて、おりてその河より渡りて、北ざまに指して行き、山に入りて見れば、大いなる童つちを掘りて物をとりいでて、火をたきてやき集めて、又大いなる木の下に行きて、樵・櫟・栗などをとりつつ、この子に言ふやう、「何しにこの山にはあるぞ」と問へば、「魚釣りに来つるぞ。おもとに食はせ奉らんとて」と言へば、「山には魚はなし。又生きたるもの殺すは罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、この掘り拾ひ集めたるものどもをとらせて、童は失せぬ。この子嬉しと思ひて、もて行きて母に食はす。このちは山に入りて、見せ知らせしいもところを掘り、又木の実・かづらの根を掘りて養ふ。雪高う降る日、いも・ところのあり所も木の実のあり所も見えぬ時に、この子、「わが身不孝ならば、この雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう降る雪、たちまちに降りやみて、日いとうららかに照りて、ありし童いで来て、例のいも・ところ焼き調じて、とらせて失せぬ。

【口訳】 こうしているうちに新年になった。この子はいよいよ大きくなり、利口ですぐれている。神仏の化身のような子なので、ただもうおとなのようになって、人に会うと、「誰の子なのか。親は何という人なのか。この近辺に住むのだろう」と言つて、詮索するので、仲忠は、「その中に自然たずね当ても来るだろう。このように歩きまわつて人にも見られ知られまい。魚はこの河にばかりいるわけでもない」と、このように思つて、下りてその河から渡つて、北の方向を指して行き、山に入つて見ると、大きな身体の子どもが土を掘つて物を取り出して、火をたいてそれを焼き集めて、また大きな木の下に行つて、椎や櫟や栗などを取りながら仲忠に言うには、「何しにこの山にいるのか」と問うので、「魚をつりに来たのですよ。お母さんに食べさせてあげようと思つて」と言つと、その子どもは、「山には魚は無い。また生きてゐるものを殺すのは罪だよ。これを拾つて食べなさい」と教へて、この掘つたり拾つたりして集めたものを仲忠に与えて、その子どもは消え失せた。仲忠は嬉しいと思つて、持つて帰つて母に食べさせた。それから後は山に入つて、先日の童が見せ教へてくれたいもやところいもを掘り、また、木の実やかずらの根を掘つて母を養つた。雪の高く降り積る日、いもやところいものあり場所も、木の実のあり場所も見えない時に、仲忠は「自分が不孝者ならば、この雪よ、ますます高く降り積れ」と言つと、その時、ひどく降る雪が急に降りやんで、日が大層うららかに照つて、例の先日の子どもがあらわれて、例のいも・ところいもなどを焼いて料理して、仲忠に与えて消え失せた。